

要 不 稿 丁 時 報

次期大統領 (三)
候補者の横顔

コンコルダンシア派大統領候補
ロベルト・オルテガ (博士)

一八九六年武市市長并護士、ラザ
カル党の分派ラザカルアンチペル
ソナリスタに属し市会議員、税務
局長を勤め下院議員として立法に
携はりアルベルト内閣に於て土木
大臣を勤めたる事あり、其の後政
界を引退し弁護士として活動し
一九三九年十二月末ヒネード蔵相
の後をうけて証任、今日に至るま
る。

コンコルダンシア派の主流を占
め大政党デモクラチアチオナルが
大統領候補者自身出身者の中よ
り選出せず、敢へてラザカルアン
チペルソナリスタ所屬のオルテガ
を選んだ所以はオルテガは大臣と
して立法に試験済みの人物であり
且つは又同派の構成分子たる諸政
党が其を希望してゐるためと、今
一つはオルテガはアルベルト時代
には土木相互動の事と反対党
ラザカルに於ては態度がよく、当
際の境は其の政策遂行に對しラザ
カル党と大に反動的な政治行動に
出でたことはあるまいとの見地し
てに基づくものとの観測されて居
る。

ラモン・S・カスティーヨ (博士)
一八七三年カタマルカ生、判事、
ラプラタ法科大学教授、ツクマン
州干涉便等運動、現行破産法
有限責任会社法等の起草者であり
て、デモクラチアチオナルに属し
一九三五年十二月末法相に証任、
昨半年はメロコ内相并証任後は内相
轉任、国内有数の法学者である。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

コンコルダンシア派の副大統領
候補者としては初めパドロンコス
タ上院副議長とカルカノ農相が有
り現されてゐたのであるが、党内
に於ては一方を立止れば今一方の
支持者連がござまらずと云つた有
限な結局、面々が苦痛の出かいた
スチゲニ内相互選が事と成りた
けである。

の蘊蓄深く大学教授として社会
の諷刺を極め、一九三〇年革命
後後社会党に入党、その卓著な
識見は直ちにコ州政界の尊敬を
一九三二年早くと党に推されて
コ州知事候補者として名乗りを
上げ、同年コ州上院議員に当選、
コ州互選として少少政治界と
して国内有数の人物である。

さて以上大統領候補者の簡歴を
述べたが、各政界の政綱政策に
しては過日の論議に於てラ、ア
ンチペルが指針してゐるが如く、
各政界の選挙に當つて程列する
処の方針に思はず、何れも大同小
異、各政界の特質を異にしてゐる
様な政策は発表されて居らず、選
挙を過ぎれば是れより了つた程度
の事である。而し同族は各政界
の各々独自の立場を表明する政綱
を発表し、民衆が其を判断し、最良
の政策と見出し、或る政黨、或る
へん中を支持してゐるが、民衆が
政黨の政治意識の低い今日に於
ては其の要諦は理想的に過ぎるが
に思はれる。從つて人物の人氣
如何の選挙に當つては通常の場合
決定的役割を演ずる事にあつて
るのである。政綱政策は我等が思
ふ程重要視されて居る。(續)

社会党 大統領候補

ニコラス・レベット (博士)

一八七一年武市市長、法律科の外
科手術に於て名をあげ、一九〇〇
年社会党に入党、以後政治に専
一、一九一四年下院議員當選、議會の
討論に於て其の才能を示し、社会
党創立者フアン・B・フアストの没後
党員一致の推薦を以て社会党総
として活躍、並に政界重鎮の一
人である。

社会党 副大統領候補
アルトゥロ・オルガス (博士)

一八九〇年コルドバ市長、社会党

政 務 官 決 定

の百四十四
議決の結果

- (東京廿四日)
- 日) 政務官
- 決定の結果
- 閣議は午後
- 四日の臨時
- 閣議は午前
- 十一時四十分全閣席
- 参集、政友会は代行
- を委員の結果政府の
- 決定した結果が都
- 合つて限り修正を要
- する事とあり中島首相より首相
- に對し、政友会としては地方團體
- を基礎として人選する事の慣例と
- を以て居るが、党内の統制上政府原
- 案の如く近畿北信地方よりは政務
- 官が出ると云ふ事は困難な政
- 務修正に對して貴方と希望した
- が首相は入閣に就ては各
- 閣僚の希望を聞いてみる關係とあ
- り変更は困難であるから諒承され
- たい旨を述べたので、中島は連日
- 閣主閣部はこの旨を通告し互求め
- 更に東方会は政務官を出てゐる事
- に決定したので旧和合の金井正
- 夫を起用する事とあり此を諒解互
- 終り直に閣議を閉じ首相より政務
- 官の氏名を報告、原案通り異議が
- 承認して午後一時十五分閣会した
- 決定氏名を左の如し
- 政務次官 参事官

海軍省 一宮房次郎 岸田正記
司法省 内山知久 藤田若水
文部省 内々崎作三郎 池田忠孝
農林省 高橋守平 野川啓四郎
商工省 木暮武太夫 佐藤謙三郎
逓信省 田島源太郎 金子正夫
鉄道省 田尻生五郎 金子正夫
拓務省 八角三郎 阿部 肇

二大政界は満足の状態
今後の政府對政界關係並に政府
の動向を示すものとして注視され
てゐる政務官の決定に對し二大政
界は満足の意を表し政府支持の態
度を示した。即ち民政黨側の願
望は一二名を除いて大体照應とさ
れたに對する党内の意向と好意的
であるが今後對政府關係は可成
り好轉するものと期待されてゐる。
一方政友会としては人物的に見
別に異論なきと、前掲の理由に基
き中島首相と修正方交渉した
が結局要求は完徹しなかつた。然
し決定した十名の顔ぶりは二名互
を除く外、向山と中島系に属してゐるの
で従来党内の中核勢力である旭山系
を起用して興味深いものがある。

政治次官 参事官
外務省 松本忠雄 船田 中
内務省 岡田永吉 木村正善
大蔵省 大田正孝 中村三之丞
陸軍省 加藤久米田郎 比佐昌平

書店
メルカード・ドレーゴ
の入口に面した盛業中のカフェ
エ、好条件に譲りたし、詳細は
ドレーゴ街一六六三番地
電話 五〇一・一〇〇二

天皇陛下、特別議會中には 御避暑の御事と御政務に御精勵

(東京廿四日) 御政務に御精勵を
せしめ給ふ天皇陛下には、来るバ
手特別議會に際しては、廿五日日曜
日の拘りせられ、御政務に御精勵
あらせられ、引續き八日下野議會開
会迄の盛夏の候に、御避暑の御事
と御政務に御精勵あらせ給ふ
御由にて、畏き御思召を拜し、

平書相を始め、
近者一應、御精勵
せられ給ふこと
の御由にて、

日英交際調整の爲

吉田大使、イデーデン外相と 正式に意見の交換をなさる

(東京廿四日) 日英交渉に
關し廿三日情報部長の外相
新調連信員の間、對し答
へた處左の如し
・吉田大使は予ての如く英國
外務省のカドガン氏其他と
日英交際調整の問題に對し
て非公式に合談を行つてゐた處
この程に至り、双方間に充分理解を
得たので、今吉田大使に對し、英外
相イデーデンとの間に正式に意見の
交換をする核訓令が發せられた。

意見交換の取目

日英交際
の全般
的改善の爲め、通商關係の調整
がその主たるものである。英國自治
領土の通商に就ては、我國は既に自
治領政府のあるものと通商協定を
締結してゐるが、

又「反スターリン的陰謀」

(モスクワ廿三日) ソヴェエ
ト聯邦に於ける反スターリ
ンの陰謀の摘発は停止する
ことを知らず、廿三日共產黨機關ア
ラウタ氏の報章によれば、中央ア
ソビエトに於て反革命工作があり

滿洲軍河を相對峙

(子午ハル廿四日) 北部國境軍一
士四層據據附近に於て交戦したソ
聯軍に對し、艦隊の潜水艦不注射
撃事件に關し、其の後の情報によれば
ソ聯軍艦は滿洲國領水内より撤
退し、ボヤールコフ水道内にあり、
滿洲國側の黒河渡橋隊と既に現地
に到着してソ聯艦隊を監視中、目
下河を挟んで西軍對峙中である。

頻々起るソ聯官憲の 邦船拿捕事件

(豊原廿四日) 函館水産学校練習
船及路丸のソビエト監視船に
抑留されたのは、本邦漁船の拿
捕事件の頻々起る折柄、又々
廿三日午前七時、樺太西海岸國境安
別杉原渡次郎所有漁船丸、徳山三三
所有喜久丸の國境付近に、地長
マソ聯官憲に拿捕された。

伊太利の庫實 東阿開癸九ヶ年計畫 經總經費百五十億リラ

(ローマ廿一日) 伊政府
は本日ムツソリト三首相
出請の下に國務會議を開
議の結果、憲案の東阿開
發遂行費として向ふ六ヶ年及び三
ヶ年の二期に分ち總額百六十億リ
ラを支出するに決定、更に官吏廉
運案即ち廉給八歩増進及び未婚の
官吏の結婚する場合十五日間の休
暇を與へると云ふ二案は之を七月
一日のうちに実施する事に決定した。
而して伊政府の東阿開發計畫に
よれば先づ六ヶ年間の經費百二十
億リラを充當し、港灣改修、耕地整
理、植林、殖民、水力電氣及び鐵
道敷設等の諸施設を行ひ、弟
二次計畫の三ヶ年間は歐道、路
等の開發費として廿億リラを充當
するとのことであり、伊政府は右計畫
完了の時は現在國內金の蓄大が海
外流出の拮据たる諸外國より購入
して居る物資即ち動物を始め肉類
材木、穀皮、羊毛、棉花等は概々
之を東阿に於て生産し得る見込み
であると云はれる。

淺間山異変に至す 降灰多量、住民恐怖

(東京廿四日) 淺間山は廿日以來
連綿的小爆發を繰り返して、暗褐色の
煙を吐き出して居り、廿三日多量
の灰を降らせ、附近住民を恐怖さ
せてゐるが、この異変の正体を知
きとめるべく、南大深間山火山觀
測班主任水上達彦氏は助手二名同
伴、廿四日登山の途に、一
口は噴火口附近をきりぬき、地磁氣
の測定を行ひ、異変の原因を研究
する筈である。

養子 当方小兒が、中年の
天壽者、養子として、三才位
の二世乃至三世の男兒を以て
し、委細面談、姓名在社

まにり丸
廿六日入港、七月廿日出版
りおでは、わろ丸
七月三日入港、七月八日出版

大阪商船

談局時の相首衛近

貴院に華族中心主義打破及び予算編成方針に就て意見を披瀝

(東京廿三日)近衛首相は十九日新聞記者團に對し左の要旨の時局談話をした。

(一)十九日杉山陸相の演説は北支歐各方面の情勢を正確に述べ、且日外務次官から内閣閣議時代の外務進歩を豫取する、東亞は海軍大臣より聞く予定にして居る、別段は差迫つた問題があるが、今後外交方針樹立に努めるため。

(二)特別議会の終つたり直ちに貴院改革 貴院に對する自今個人の考へを云へば從來貴院

本年度上半期 対外貿易の特徴

(東京廿三日)本年度対外貿易は本週迄の累計計六億突破により既にその大勢は決した。今上半期貿易の特徴と見られる諸点を挙ぐれば次の通りである。

(一)巨額の輸入は輸出の額を凌ぐ。と不測、地方に於て輸入が我國現下の情勢を反映し必然的に増大した点がある。

(二)輸出の基礎が順調で前年同期に比し二割五分の増加を来した。輸出品の一般的に値上り。

(三)海外市場に於ける邦品輸入阻止が一巡し中には蘭印の如く輸入量の増大を計るに至つた。

(四)完成品の輸出が増加し半製品粗製品の輸出減少し一般に輸出量價向上せしむ。

(五)一方輸入の増大は生産力拡充の

旧慣を破る近衛内閣 政務官全部を

衆議院議員中より任命

左増加し、概して華族にのみ諸席を充へると云ふ制度は此すしと賛成でない。

(三) 明年度予算 編成は先内閣財政経済三原則によりて日滿兩國を打つて一丸とした総合的計画を基礎とし国防と財政との調和を計る方針の下に滿洲國の五ヶ年計画と融合せしめ、行きたらんと思つて目下企画院、具体案を研究中であるが、之等の一部は衆議院に干渉するものも表はれるであらう。

(東京廿三日)本日の衆議院は午前十時十分より首相官邸に開かれ、近衛首相より政務官設置の可否につき意見を問ひ、満場一致を以て設置する事に決定した。貴族院よりは一各ととり、廿四名全部を衆議院より取る事を決定した上、之の爲に直接の簡章と是に伴ふ同様の簡章により着増した。内容的に見ると完成品の輸入の減少し原料品の増大し、而して今後の日先としては昨年の如く下半期に入る早々輸出に轉換することは

電制統力

大衆的精神を以て協力せよ 永井選相業者へ要望

(東京廿三日)本日正午電氣クラブで開かれた電氣協会主催の永井選相記者招待會の席上永井選相より、一電力の産業経済上に於ける重要地位、一我が内外情勢の緊急に伴ひ日滿人選は従つて首相に一任する事に決した。故つて風見書記官長、澁法判事、各派の代表は、同日午後、永井首相の報告し首相の對策を仰ぐ事あり、各派の代表は、民政九、政友九、其他の諸会派、無所属六とある様様で、入選に關しては中島永井の党出、各各派と打合せを遂行する事とあるべく、臨時の議場に於ては、廿五日の閣議で各省三名宛廿四名の政務官が決定任命されるであらう。

近衛内閣の政務官設置の根本方針は、大正十四年度政務官制改訂の通り、従つて人選とこの相本方針に沿ふよう、慎重に選任し、從來の権限を排して、何處も政策に理解のある有能の士を其の方針である。

独自の見解

近衛首相の報告は、行政の現状を計つて、首相は首相の行政の示したものであると同時に、行政のやり方に対する新鮮味を發揮した。このように各方面で大いに注目されてゐる。従つて人選とこの相本方針に沿ふよう、慎重に選任し、從來の権限を排して、何處も政策に理解のある有能の士を其の方針である。

新駐日 舘野大 便任命

(東京廿三日)滿洲國政府は、新任駐日大使として、文部大臣 舘野大 便任命を決定した。



比島独立のからくり

比島の独立は九年度と規定する現行独立法を修正して、一年か二年後に短縮する案が、米国に於て起草され、ある。政府筋では大體独立促進に賛成であり、そのために起草委員までも造った款であるが、共和党とか海軍側とかには、反対論が可なり強いのだ。

反対論のうちには、我々から観れば、美止に備ふるのであるが、日本がフィリピンを奪ふに相違ないからと云ふものがある。これは独立促進に反対するのではなく、独立そのものに反対するのであるから、これは問題とする限りはあらず、これと同時に日本がフィリピンを奪ふ虞れがあるからこそ、早くこれを独立せしめ中立化するの必要があるのだと云ふ反駁論も、同じ意味に於て問題とせらるべきではない。

ところで独立の促進を、今まで進めつたのは、ケソンの手帳だとも云はれる。手帳だとすれば、我々はこれを無難から駒が飛び出したやうの手帳だと云はなければならぬと思ふ。蓋しアマナルド將軍やサタダリスと異なり、即

時独立論は反対であるケソンが即時独立論者に早変わりし、それが米國政府を動かすに至つたのは、突に偶然のキツカケがこれを然らしたためであるからである。

ケソンが米國に押渡さるや、議会は於て一ポイントにつき四分の三の票で、砂糖及び米の問題と云つて居た。そこで彼はこの戻り税はフィリピン糖にも当然適用せらるべきものであると云つたところ、米國側では「イヤ適用されぬ」と、この問題に關する限り、フィリピンは外國である」と答へたと云ふのである。

ところが戻り税が買へなくてはフィリピン糖の糖業は大打撃を受ける。序でにケソンその人も少からず名を失墜する。そこで彼は躍起となつて「ソコにフィリピンを離すに於ては、即時独立を許されたい」と相き痛いと云ふ突

つ二人を續りたところ、どうせ比島は棄て子にする積りの米國であるから「泰無知我候」と云つた款。そこで前記起草委員の使命と云つたものであつたから、其の向からくりは相當なものと云ふべきだ。

然るに、この妙事か起つた。それは独立促進の報がマニラに飛ぶや、株式市場は大混亂。遂に立会停止の已むなきに至つた事である。これはフィリピン糖の経済機構が一

に米國に依存し、米國と離れては成立し兼ねることを反證するものから見て、独立促進への反対は、米國よりも或はフィリピンそのものからして、より熾烈であることが考へ得られる。

それから今一つ考へられることは、この株式界の混亂が「独立の準備は完成せり」と云ふケソンの返りの声明を弱く哀なるものから云へるのである。準備が無いか、それアワテアワテたりする準備があつたらアワテたりするとは考へられぬ。元來フィリピン独立法なるものは、米國の暴民救済と云ふからくりの所産であるが、その促進も同じくからりされてゐるのには、誠は首尾を一貫せらるるものと云ふべきであらう。

ドイツが「経済四年計画」を發表して、その完成を宣明したのには、つい昨秋のことであつたが、それは「経済計画」ではなくては生産的競争目的のためにする「非経済計画」だと云ふので、これ

に反対する覚書が、政府内部からヒットラー總統に手交されようとしてゐると伝へられる。

それは第一は、兩軍備のため軍需産業に専念するの余り、国内の資本と熟練労働が、この部門にのみ吸収され、平和産業が萎縮し、輸出がダメにぶつたからである。

第二は、ために食糧問題。食糧飢饉が惹起されたからである。いふまでもなく、今日のバーター制度のもとでは、前述のやうな輸出の減退は直ちに輸入を妨げるが、ドイツの貿易統制下で輸入の許可される順序は、第一は兩軍備のため、第二は合成原料製造に必要原料、第三は兩輸出品製造のための原料であつて、最後に食糧品のみである。

そこで食糧飢饉が必然化して、卵、バター、肉類などは容易に手に入るものが出来ぬと云ふので、この計畫の指導者ケーリングは、安んずる「パン」だけは決して國民に不自由させぬと云はざるを得ぬかつたのである。

及び馬鈴薯澱粉製菓の菓子とか、或は脱脂乳などの原料に混ぜるものまで、一々買手にことける必要はないと云ふ様な命令であり、その二は、三月十五日以後は、小麦粉に七パーセントの王蜀黍の粉末を混入すべしとする強制命令である。

これは類似した経済統制は、何もドイツのみではなく、日本の現状に於ても見出されるのである。「軍需生産力の充実」が政府唯一の事業となり、今現に熟練労働の飢饉が憂へられてゐる。激増する入起は引きつゞき金の増進によつて決済され、貿易統制が行はれると云ふ状態、そして物價騰貴は大家の生命線を脅かして貧乏階級を預せしめつゝあるのである。

ドイツといふ日本といふも、何れにしても此の澎湃たる社会不安と、それから来る國民大衆の「意見」を、政府は赤手で支へるの如きセステアであらうと云ふ心算の強さである。

そのパンについては、果して國民が不自由してゐないかどうかは疑はしいものだ。つい二三ヶ月前にも次のやうな命令が失つて、手配に公布されたからである。それは、パン

琉球音楽会

初等科、中等科に區別
但し初等科申込期日、六月廿四日迄、授業開始七月
第一土曜日午後二時(十二時)
中等科は従前通り
市内モントス街一六四六
電話二一三三、八四二四

安里 龜栄

懸賞讀物

僕に百万ペソ當つたり

香川三豊

作佳外選

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

私は一人の恋人がある。彼女
の名前はテリヤと云ふのだ。彼女
と初めて知り合つてから、もう約
一年許りにあつてあつた。
或る春の日、私は下宿から二三
丁離れた、街角で、彼女を一目見
た時、急に好きになつて了つたの
と云ふ程にまであつたのである。
然るに何なる事ぞ、不意に一人
の有力な競争者が出現したのであ
る。而も私の様か貧乏人ではあ
つて、巨万の富を持つ一人息子と云
ふ。名はロベルトと云ふかか
かの色男、女の前では教養振つた
態度で、甘い言葉で誘ひしやべ
つてゐるが、陰へ廻れば中々に横
はす目録を達しようとする気性の
男である。私は少からず不安にあ
りおした。

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

ACADEMIA DE BAILES
★
SARITA
CANGALLO 1279

タンサー教多補充 陣容一新
是非一度当教習所へ!!
回数券十回分練習用(ペソ)初歩用(ニソ)
但し日本人の方には限り割引あり

PROFESSORA
SAKA M. LOZ

「デリヤはもう婚約者があります
どうぞもうこれ以上娘に付きま
ないで貰ひませう」
私は淋しく去らねばならぬあつた。

「僕に百万ペソ當つたり」非常な
痛快な言葉である。私は此の標題
を讀んだ時、一種の胸震ひを覚
えた。私凡情の貧乏人は一生懸
つても、百万円は悪かぞの半分も溜
る可能性はないのである。然し乍
ら偶然の幸福で若し百万ペソ當つ
たら、切ごんが凡に使つて見よ
うか。あ、あやうか、こう使は
うか。結局私の様か阿茶には百万
円の有益な使途等が皆無か
つた。考へられた果に、私はつい
う、うと眠つて了つた。そして
美しい夢を見て了つたのである。
夢には時々私達の平常望んで居
る事が願はれる。私の夢は「若し百
万円當つたら」一考へられた揚
句の産物だから、撰出された題の
答にふらぬとも云はれぬ。こゝに
自分勝手な理想で、先づ私の
夢の話を解説して置く。

KEROFIX
DEL SR. ALEMAN

製作販売並に
修繕取付、交換
格安にて引受け
日本人間に教
習者正有しは
申口入念運送
電話で御一報次
先至急参上教
します

原商店
Belgrano 470
W. 83 Mayo 2438

PACHECO 3260 U.T. 51-3252

算盤、麻雀、各種
日本食器類
原商店

日会本年度の 評議員決定

在日日本人会の本年度評議員は各団体から二名宛選出して十四名、他に会長推薦による十五名、都合廿九名左記の諸氏に決定した。

花卉組合—高市 茂 高見深佐助
蔬菜組合—中久和 一 石川 浩
茶葉組合—奇藤彦藏 大坪善義
神農海協—喜原武雄 徳川清英
熊本海協—後藤貞彦 田中清喜
商業会所—小川 勇 飯野栄作
日青会—加藤克一 沖田末治
〔会長推薦〕 三木重幹 花房契夫
延満三五郎 安東定夫 余東虎雄
大野幹三 石川芳範 久慈 忠
高田運喜 賀集九平 石井忠吉
有水藤太郎 花田行武 細川錦太郎
下保社道

恩賜救済会 本年度役員顔觸れ

日会附恩賜救済会本年度役員は此の程全部決定したが全在在同胞各方面の人士を網羅しおかく願ひを願ふ所である。

会長 寺嶋廣文 副会長 中村米平
幹事 下保社道 庶務長 久慈忠
会計 宮田政市 高田運喜

〔評議員〕
奇藤彦藏(茶葉組合) 石川倉次郎
(蔬菜組合) 廣内善平(熊本海協)

仲岡嘉(神農海協) 赤金藏(花卉組合) 中原宗吉(自動車協会) 三本重幹(商業会所) 熊沢六十郎(公教会) 安野スミ子(友文会)

宮里富(日会市支部) 山岸新作(ヨルバ日会) 比嘉徳次郎(ヨリエニテス日会) 平井庄六(サンタラエ日会) 片山武平 大城正雄 宇野九郎(在日日本人会)

会長推薦による評議員は左記諸氏
花田行武 高木広一 大西佐一郎
水野 勉 有水藤太郎 安東定夫
鈴木順一郎 石川芳範 辻せい子
高見深まき子(以上市) 井口宗(ソクマン方面) 吉崎興吉(サルラ方面) 山口喜代志(ミシオオス方面) 藤清藏(メンドサ方面) 上條泰三郎(チヤコ方面)

英資本の 鉄道経営を視て巡る

日本から三技師末亜

我々現今の鉄道施設技術の世界は短絶せる事は各回等しく説くところであり、先はソウェート種和主始めトルコ等の近東諸国からの招聘により日本の技術がそれく彼地に派遣されて「技術日本」の真價を發揮したのであるが、今度我が鉄道省では海外に於ける英、國資本下の鉄道経営を技術的に調査せしむるために最近鉄道技師島秀雄(横関運橋造) 下山定

藤原義江来る？ 南米演劇契約成立

テナー藤原義江氏は来る九月より十月に限りラチナルセンタラエ中心とする南米、十一月からはペリリ中心とする歐洲への演劇契約が成立し、八月日本出発を理由で先づリオに集ることになった。氏は紐育のラゲオ界へ進出中不幸病魔に襲はれ夫人秋子さんと義昭君は看護のため渡米滞在中であつたがこれを同伴して去る五月同地を発した日技九で一旦帰朝したものである。

帰朝の途次伯國から 三浦書記官末亜

ブラジルの大使館書記官三浦大次郎氏は伯國の途次去る廿三日パンアメリカ号にて来亜、目下当地に於ける野人發展状態を視察中であるが、同氏は来る廿九日鉄道省に帰朝する。

富山県専門学校教授金田義成氏は去る廿三日パンアメリカ号にて北米より来亜、目下各方面を視察中である。

羊毛市場視察

歐洲及び南阿の視察を終へて兼松商店羊毛評議員今面藤原氏はターバンより来る三日のリオで来亜の筈である。

日青主催の柔剣道大会は 倉々末る七月四日(日)午後

行されること、及び、此の程当日の審判官も全部決定した。尚ほ出場希望者は姓名並に日青事務局まで申込みのこと、今から日青館で練習することもある。

日青主催のバイレ
紀報一頁では来る十一月午後三時

基督教青年ホーム ベニオン定期又は二時的 聖書研究 毎土曜日夜八時より

市内カセロス街一九八三
J. T. 三三(アール)九八七三
守屋保吉

人 事務斐文氏(三美商業支店長)ハ

月初旬帰朝の予定、後任西沢武雄氏は七月末に紐育支店より来亜、同氏は七月八日に出帆の筈、今息同伴り九月に帰朝の筈、左々本報一氏夫人並に家族同上、高市茂氏令嬢笑子さん、同上、帰朝の上松山のミッシヨンスクール(兼雲高女)に入字の筈、重野亨氏去る廿三日メンドーサより見学のため出帆、二週同滞の予定

リオは予定より
二日遅れて七月三日入港予定

浅草五重塔異變

陸に運り来て同様に達成することが出来なかつたが去

りのである、費用は大体一十餘円で學術振興会からの補助金をこねに當て先月よりその諸施設に着

加することになった。近藤主事は日本の代表映画として松竹大船プロ製作荒城の月同協

会の現代日本はが数本の文化映画を携行して五月廿日横濱港出帆の

浅間丸で出発、会議前にアメリカイギリス、フランス、ドイツ、オ

ランダ等各國の国際映画の政策、製作、宣傳事業を視察する一方わが国映画の古界進出のため携行映画を紹介して輸出市場の開拓に努

力、さらにニューヨーク、パリに同協会の支部を設立して今後の連絡に備へたう、ヘニエスの会議に出席する予定である。

これによつてわが国際映画の製作と海外進出が一層改善されるものと期待されてゐる。

地と震の比

地震國日本の不幸を災害防止の新たな研究題目で多量の成果を収めた同研究所で多量の宿願であつた日本建築の誇り誇る五重塔の耐震研究が、いよいよ帝大耐震研究所の谷田時太郎博士によつて近々その緒につくことになり、わが地震學界からその成果が期待されてゐる。

大正十五年東京で開かれた第三回汎太平洋學術會議の席上問題となつた五重塔の耐震的研究はその後、度々企図されたが、その程度五重塔の国宝的存在、その他の支

二、月名古屋城天守閣の耐震研究に多大の成果を収めた同研究所で、はいよいよ積極的に五重塔の耐震研究を開始することに決定、浅草傳法院の好意を諒解に力を得て、浅草寺境内の五重塔と仁王門を舞台として地震力を測定すべく、避震度地震計を五重塔の各階に五箇所に設置し、外線から電流を導いて電燈を点し、小モーターを便つて初期微動、継続時間、震源地等を自動的に記録するほか、これ等の結果から五重塔の耐震力を研究今後の耐震家屋の建築その他災害予防の一助に資せんとする

協会の交際と向上をはかる万回映畫會議は今夏八月十日から十五日間イタリーのマニスマで開催されるが最近現代日本の海外進出の製作を紹介するために国際映画の製作に大奮と努めてゐる外務省文化事業部、鉄道省觀光局でもわが国から始めて代表者と参加させることになり文化事業部関係の国際映畫協会主事近藤藤雄氏が選ばれて奉

加することになった。近藤主事は日本の代表映画として松竹大船プロ製作荒城の月同協会の現代日本はが数本の文化映画を携行して五月廿日横濱港出帆の浅間丸で出発、会議前にアメリカイギリス、フランス、ドイツ、オランダ等各國の国際映画の政策、製作、宣傳事業を視察する一方わが国映画の古界進出のため携行映画を紹介して輸出市場の開拓に努

國際聯盟から激石の出版

國際聯盟協力の委員会から日本叢書の第一編として、松尾邦之助氏の「激石」出版されたが、第二編の候補作品として日本ペン俱樂部では激石の「激石」の新社出版の「あらくし」を推薦してゐるところ、最近編輯中の國際聯盟東洋部主任佐藤謙造氏の斡旋により、日佛兩國に於て協議の結果「激石」の正式に決定した。

右はジョルジュ・ボノ、堀口大學両氏により併訳された本邦中には上梓の予定である。

男女の共学に

一 株の不安を

最近ドイツにおける青年男女の間に、かなり風紀をみだす者が多くその結果、私立校の出産率も意外の多数に上つてゐるが、この傾向を憂へたヒットラー總統は最近風紀紊乱に就ての刑法に全面的な

改正を加へ、ナチス精神に基づいて嚴罰主義を採ることになつたと云ふ、ところがこの原因とも見られるのは、これまでのナチス軍事教練が青年男女混成の下に行はれ、従つて山野でのキャンプ生活など、男女が接近するに由り、機会を失つたことにあると見られ、男女共学の將來に一株の不安を感じせしむるに至つたと云ふ。

汎太婦人会議の議案
今夏七月十二日から廿四日までバンクーバー市で開催される第四

回汎太平洋婦人会議に於る討議事項は左の七項目に決定したが、我が國からは回下その会長の椅子にあるガンドレット恒子女士が出席する

一、女子青年の平和運動
二、武器の取引
三、國際貿易競争上における労働標準及び生活標準
四、大平洋上の平和と人口問題
五、手論喚起開発のテクニク
六、社会問題としての保健問題
七、社会の進歩と教育の調和

本日選活跡の

ムバルアケツピンリオを草豪らかツイド

各界有数の煙草会社として知られてゐる例のゲルマソルテの製造元ドイツのレームツマ煙草会社から日本の愛煙家へのあ礼と日独親善のためにと数日前取引先の丸ノ内三丁回有樂館内株式会社岩井商店へ第十一回オリオンピク大会における日本選手

の活躍やオリオンピク村のほろまほしい情景をとりこんだ豪華な写真集をアルバム百冊が秩父宮殿下御幸り近衛公、広内閣閣僚の御傍次官、嘉納、副島伯らオリオンピク関係者の贈呈先を指定して送つて来た。

アルバムは縦一尺五寸、横二尺余、いかにドイツらしい落付いた装釘で表紙には四角旗と、十一回オリオンピク、ベルリン一九三六の金文字が抜いてあり、写真は一頁の東京オリオンピクが中心、トトラー總統に羽織を贈る光景から始まり、日本選手の旅費、オースタゲアムに於ける活躍、オリオンピク村における生活、凱旋までの歴史的な写真八十余枚が収録してある。

Buenos Aires, sábado 26 de Junio de 1937

SECCION CASTELLANA

Dirección: USPALLATA 981, U. T. 23-7051

El deber de Lealtad

El caso del hijo de Michizane Sugawara

Por el Dr. INAZO NITOBE

A pesar de la crítica de Hegel, según la cual la fidelidad de los vasallos feudales, siendo obediencia a un individuo y no a una comunidad, es un lazo establecido sobre principios absolutamente injustos — (Filosofía de la historia) —, un gran patriota suyo se jactaba de que la lealtad personal fuese una virtud germanica. Bismark tenía buenas razones para decirlo, no porque el feudo que el abababa naya sido monopolio de su patria ni de ningún otro país o raza, sino porque este iruto favorito de la caballería duro más en el pueblo donde el feudalismo ha sido más largo. En América, donde "cada uno es tanto como otro", y, como anadió el irlandés: "más aún", ideas exaltadas de lealtad, tales como las que nosotros tenemos para nuestro soberano, pueden considerarse "excelentes dentro de ciertos límites", pero absurdas en la forma en que nosotros las cultivamos. Montesquieu se quejaba hace mucho tiempo de que lo justo en un lado de los Pirios fuese injusto en el otro; y el proceso Dreyfus probó la verdad esta observación, salvo que no eran solo los Pirios el límite que marcaba el desacuerdo de la justicia francesa. De un modo semejante, la lealtad, tal como nosotros la concebimos, puede encontrar pocos admiradores fuera de nuestro país, no porque nuestra concepción sea errónea, sino porque se ha olvidado, creo yo, en otras partes, y porque nosotros la llevamos a un grado a que no llegó ningún otro país. El Dr. Griffiths (autor del libro "Religions of Japan"), tenía perfecta razón para decir que mientras en China la moral de Confucio hizo de la obediencia a los padres el primer deber humano, en Japón se dió preferencia a la lealtad. A riesgo de herir los sentimientos de algunos de mis buenos lectores, contaré la historia de un hombre que "pudo tener bastante fuerza de voluntad para seguir a su señor caído", y que por ello, como asegura Shakespeare, "mereció un lugar en la historia".

Es la historia de uno de los caracteres más puros que han existido en nuestro país, de Michizane, el cual, habiendo caído víctima de la envidia y la calumnia, fué desterrado de la capital. No contentos con esto, sus encarnizados enemigos resuelven aniquilar la familia. Buscan con interés a su hijo, niño aún, y averiguan que está oculto en una escuela de aldea, perteneciente a un tal Genzō, antiguo vasallo de Michizane. El maestro de escuela recibe inmediatamente la orden de entregar, en una fecha determinada, la cabeza del juvenil reo. Hondamente herido por la noticia, en procura de salvar la vida de su señor, Genzō trata de buscar otro niño en sustitución de aquel. Recorre la lista de la escuela, examina con ojos ansiosos a todos los muchachos, según van entrando a la clase, pero ninguno de éstos de la región tienen la menor semejanza con su protegido. Mas, como caído del cielo, llega un nuevo alumno, un bello niño de la misma edad del hijo de Michizane, aspecto noble igual que la madre que lo acompañaba. Igualmente conscientes de la semejanza de ambos niños son la madre y el alumno nuevo. Es

que estos dos seres han hecho sacrificio ante el altar del hogar: el uno su vida y la otra del corazón, aunque no han dejado escapar señal alguno tales sacrificios. Ignorante de lo que ha ocurrido entre ellos, es el maestro quien primero sugiere la solución.

El día señalado llega el oficial que ha de identificar y recibir la cabeza del joven. Será engañado por la cabeza sustituida? La mano del pobre Genzō se apoya en la empuñadura de su espada, pronta a herir al emisario o a sí mismo, en caso de que el exámen desbaratase su estratagema. Oficial coloca delante de sí el horrible despojo, examina lentamente cada facción y en un tono decidido, solemne, declara que es legítimo.

Aquella tarde, en una casa solitaria, esperaba la madre que vimos en la escuela. Sabe ya la suerte de su hijo? No es su vuelta lo que asecha con ansiedad. Su suegro ha recibido durante mucho tiempo la protección de Michizane, pero desde su destierro las circunstancias han obligado a su marido a entrar al servicio de un enemigo de la familia de su bienhechor. No puede ser desleal a su cruel señor, él mismo; pero su hijo puede servir a la causa del señor de su abuelo. Como conocedor del asilo de la familia a él se le ha confiado la misión de identificar la cabeza del muchacho. Terminada la dura labor del día — de la vida! — vuelve a su casa, y al cruzar el umbral de la puerta se encuentra con su mujer, le dice: "Regocíjate, mujer, nuestro amado hijo ha sido útil a su señor!".

"Que horrible historia", oigo exclamar a mis lectores, "unos padres que voluntariamente sacrifican a su hijo inocente para salvar la vida del hijo de otro hombre". Pero ese niño era víctima consciente y voluntaria: es una historia de muerte por sustitución, igualmente significativa, y no es más repugnante que la historia de Isaac, intentado por Abraham. En ambos casos es la obediencia al llamamiento del deber, la sumisión ciega a la orden de una voz superior, emitida por un ángel visible o invisible, oída por un oído exterior o por un oído interior....

Influencias occidentales en la historia y en la cultura del Japón.

POR EL DR. IZURU SHINMURA, PROFESOR DE LA UNIVERSIDAD DE TOKIO

Nuestro estudio abarca aproximadamente los trescientos años anteriores al 1860, cuando el Japón abrió de nuevo las puertas al intercambio con los países orientales.

Esos trescientos años deben dividirse en dos partes, a saber: el *kaikoku jidai* (período del libre intercambio con los extranjeros) y el *sakoku jidai* (período de aislamiento). Por período de libre intercambio se entiende la época en que la cultura material y espiritual de los países del sur de Europa, principalmente, se infiltró en el Japón con relativa rapidez, a partir de la llegada de un barco portugués a una isla situada al sur de Kyushu, hacia el año 1543. El arribo de esa nave abrió el

camino de libre acceso a los puertos del Japón para los barcos portugueses y más tarde españoles, seguidos, medio siglo después, para las embarcaciones alemanas y francesas. Desde entonces, y hasta 1640, se permitió a los japoneses ir al exterior; aunque muy raras veces se aventuraron ellos por el sur de Europa y por la América Central. Más frecuentemente se dirigieron a puntos como Macao, sur de China y a otras posesiones y colonias europeas de los mares del sur y de la India. Los europeos, por su parte, quedaron en aptitud de establecerse en los puertos y ciudades y de penetrar al interior, toda vez que se les permitió hacer comercio y propagar su religión. Por esa causa se denomina a tal época, *kaikoku jidai* (período del país abierto) o bien *kahio jidai* (período de puerta abierta).

Período de aislamiento significa el extenso lapso, de cerca de doscientos años, que comienza en 1630, tiempo en que el shogunado de Tokugawa adoptó la política de clausura gradual del país a la penetración de las naciones europeas, mediante la prohibición de regreso a los japoneses residentes en el exterior; impidiendo a los súbditos y a los barcos japoneses dirigirse a países extranjeros y finalmente adoptando medidas extremas para limitar el número de barcos de otras nacionalidades que entraran al Japón. Durante esa misma época, año tras año se fué limitando el número de navíos europeos a los que se concedía permiso de hacer comercio con el Japón, que pertenecían a una sola nación: Holanda. Se fijó el puerto de Nagasaki como el único autorizado para el tráfico con Alemania. Se restringió el comercio tanto en lo relativo al número, cuanto al volumen de las mercancías. Todavía más: aparte de la estricta concesión y el área limitada dentro de las cuales podían los extranjeros aventurarse para su distracción, se les sujetó a la más severa vigilancia y control. Por lo tanto, resulta innecesario decir que durante esos dos siglos enteros, la importación de los adelantos materiales de Occidente fué difícilísima y naturalmente la cultura espiritual e intelectual de los occidentales, salvo algunos conocimientos sobre arte y ciencias naturales, quedó totalmente suprimida y careciendo éstos últimos, de la oportunidad necesaria para desarrollarse independientemente dentro del país.

Habremos de examinar ahora, la influencia de la cultura occidental sobre el Japón abordando por separado cada uno de los aludidos períodos.

(Continuará en el próximo número).

JAPON NO ACEPTA LA PROPOSICION DE EE. UU.

Tokio, Junio 18.— El ministro de Relaciones Exteriores, señor Hirota, entregó al embajador de los Estados Unidos la contestación del gobierno japonés, negándose a aceptar la proposición del gobierno de Washington, concerniente a la limitación de la artillería naval a 14 pulgadas.

La nota pone de relieve que la actitud del Japón con respecto al desarme no puede variar, y que "resultaría difícil llegar a un acuerdo únicamente sobre el desarme cualitativo".

SINTONICE EL PROGRAMA DE LA

Osaka Shosen Kaisha

todas las miércoles a las 19 horas.

POR

RADIO
EXCELSIOR

LAMPARAS "YAMADA" DE CALIDAD



Luz Clara - Terminación Prolija - Selección Especial

USE LAMPARA "YAMADA"

En venta en las buenas casas del ramo

!Beba buen café!

EL CAFE DE SANTOS "AGUILA" está elaborado con los mejores cafés que se importan del Brasil, tostados y con un 10 o/o de azúcar abrigantado. ¡Nada más!

Muchos cafés que por ahí se expenden, ¿podrían afirmar otro tanto?

Deduzca Vd. y prefiera el

CAFE DE SANTOS "AGUILA"

ES UN PRODUCTO SAINT.

SITUACION SOVIETICA SEGUN MINISTRO HIROTA

Tokio, 18.— Durante la reunión del Consejo de Ministros, el ministro de Relaciones Exteriores, Sr. Hirota, se refirió en forma oficiosa a la ejecución de los generales soviéticos, declarando que el Sr. Stalin temía sobremanera la aparición de un "Napoleón". Para el Sr. Hirota, la situación política de los Soviets es comparable a la de Francia, al terminar la revolución francesa, es decir, cuando la aristocracia pudo reconquistar el poder y encaminar Napoleón hacia el trono. El señor Stalin ordenó la ejecución del mariscal Tukachevski, quien se perfilaba como el futuro Napoleón soviético.

Según el diario "Miyako Shimbun", el Sr. Hirota habría agregado: "Las ejecuciones demuestran la debilidad del ejército soviético, provocada por las disensiones entre los elementos jóvenes revolucionarios y los generales que se han vuelto de tendencias conservadoras".

PRESIDENCIA DE LA CAMARA de los PARES

Tokio, Junio 18.— El conde Yorihiisa Matsudaira, que desempeñaba el cargo de vicepresidente de la Cámara de los Pares—(nobles)—reemplazará al príncipe Fumimaro Konoye, actual primer ministro, en la presidencia de la cámara mencionada.

El marquez Yukitada Sasaki, has ido designado para ocupar la vicepresidencia.

CREARASE UNA ACADEMIA IMPERIAL DE ARTE Y LITERATURA

El Ministerio de Educación del Japón ha sometido a la consideración del Gabinete el proyecto sobre la creación de una Academia de Arte y Literatura en sustitución de la de Bellas Artes ya existente.

La comisión en cargada de estudiar la organización de la nueva Academia, ha presentado, asimismo, la nómina de los candidatos para integrar los miembros correspondientes a literatura, figurando entre otros, los señores Toson Shimazaki, Kan Kikuchi, Shusei Akita, etc.

EL JAPON INSTITUCIONAL

Conferencia de G. Yoshio Shinya

En el Instituto Cultural Argentino-Japonés, el jueves 24 del corriente y ante un público selecto y numeroso, pronunció su anunciada conferencia el señor G. Yoshio Shinya, sobre el tema: "El Japón Institucional".

Abrió la conversación el señor Shinya, con un breve estudio de la situación mundial trastornada a raíz de la última guerra, que hace peligrar las bases de sus instituciones establecidas, diciendo que la tendencia general que parece predominar es de carácter antidemocrático en los países occidentales, mientras que, por un raro contraste, el oriente aspira hoy más que nunca a la implantación de los principios liberales.

Refiriéndose al pesimismo de Europa dijo que con el espíritu joven y optimista del nuevo mundo y del oriente rejuvenecido, la situación puede ser estimada de otro modo. La civilización tiende a nivelar las condiciones de los hombres, sin distinción de credo ni de raza; y agregó: En esta obra magna que la posteridad apreciará mejor, fi-

gura en primer término el Japón, que siendo un país oriental está convertido en defensor de la civilización occidental.

Luego, entrando en el tema, explicó el carácter de la magna Carta y la forma de gobierno del Japón que es monarquía constitucional, recalcando la importancia tradicional de la Casa Imperial del Japón y aclaró el concepto que tiene el pueblo nipón de su Emperador, el jefe supremo y único, natural y legal, espiritual y tradicionalmente reconocido por todos los súbditos.

La Familia Imperial para los nipones es lo que el Sol para el universo. Es la fuente de toda su actividad, la existencia misma del Imperio. Este concepto "sui generis" del Japón podrá ser fácilmente comprendido, dijo, "si añadís a su razón de ser histórico, el sentimiento noble que palpita en nuestros corazones al rendir el culto a la bandera argentina. El emperador del Japón, es el símbolo viviente de la Nación japonesa.

Examinó el orador el contenido del famoso juramento imperial dado por el Emperador Mutsuhito en 1870, que calificó como la verdadera carta magna del Japón moderno. El documento señalaba la ruta que habría de seguir el Japón en su marcha ascendente. Los propósitos allí expuestos y que fueron fielmente cumplidos, dieron por resultado las obras realizadas por el Japón que hoy ocupa un puesto entre las grandes potencias del mundo. No es mi propósito analizarlo, dijo, sino llamar la atención de los estudiosos para investigar aquellos problemas que redundan en beneficio de los países del continente americano.

La segunda parte de la conferencia que se refiere a las actividades culturales del Japón, las daremos en el próximo número.

"NAMBET"

Compañía de Importación y Exportación Sociedad Anónima
Telegramas "NAMBET"
U. T. (33) 3001, 3002, 3003, 3004, 3008 y 3571
T. T. Buenos Aires, 904

SARMIENTO 470 BUENOS AIRES

K. ANNO

The National City Bank of New York
BARTOLOME MITRE 502
U. T. Avenida 33 - 4031

H. KATO

Unica Fábrica Japonesa de Tejidos de Sedas y Gran Instalación de Tintorería
HERRERA 2097 y 2111 - U. T. 21-1841

SADAO HATTORI IMPORTADOR

Especialidad en artículos de Cepillería
LINIERS 640 - U. T. 45, Loria 321P

KATSUDA y Cia.

Importadores
MEXICO 1474 - U. T. 38, Mayo 2813

B. TAKINAMI

Importador
Casa Establecida en el año 1905
VICTORIA 788 - U. T. Mayo 38-3413

I. HIROTA

Importador de artículos generales del Japón
CHILE 1080 - U. T. 37 (Riv.) 1051

A. HANAFUSA

Representante de
Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltda.
FLORIDA 229 U. T. 38-5400

S. YAMADA y Cia.

Importadores
MORENO 2039
U. T. Cuyo, 47-4354 y 4405

IIDA y Cia. Ltda. (Takashimaya)

Importadores y Exportadores
RODRIGUEZ PEÑA 182
U. T. Mayo 38-3419

R. HARA y Cia.

Importadores
BELGRANO 1470
U. T. Mayo 38-2438 y 9437

CARLOS C. ISHIY

Importador y Exportador
Bmé. MITRE 341 - U. T. 38 Avda. 9782

S. YOKOBORI

Representante de FUJISAKI y Cia.
CANGALLO 400
3er. Piso Esqr. N.º 21-22 - U. T. 32-9000

TARO MURAI

Unica Casa Introdutora de
Porcelana "NORITAKE"
MAIPU 406 - U. T. Retiro 31-3180

F. KANEMATSU y Cia. Ltda.

Importaciones y Exportaciones
JUJUY 136 - U. T. 45, Loria 5823 y 5824

PIDA SIEMPRE

Marca KANEBO
PARA TEJIDOS
Avda. ROQUE SAENZ PEÑA 980
U. T. 35-7632 8.º piso Oficina D

M. OMURA

Importador de artículos generales del Japón
SAN MARTIN 205 - U. T. 28-2008

S. ANDO y Cia.

Importadores
BERNARDO DE IRIGOYEN 143
U. T. Mayo 38-1402

JIRO HONDA y Hno.

Importadores de Artículos Generales del Japón
MORENO 1320 - U. T. 38 Mayo 2718

Casa "YAMANAKA"

Oriental Fine Art Curious
VIAMONTE 684 - U. T. 31 7846

K. YASUNAGA

Compañía Argentina, Comercial e Industrial de Pescaería
DEFENGA 1007 - U. T. 38-7700

S. TSUJI.

Importador
BALCARCE 682 - U. T. 38 Avda. 5744

LA MAISON SATUMA K. YOKOHAMA

Objetos de Arte y Antigüedades
ESMERALDA 1080 - U. T. 31-8601
Sucursal:
SUIPACHA 805 - U. T. 31-4887

Sastrería JAPONESA

Fundada en el año 1916
de S. KATAYAMA
PIEDRAS 572 - U. T. 38-5482

GUIA JAPONESA

LEGACION DEL JAPON: Reconquista 336. - U. T. 31-3192.

CONSULADO DEL JAPON: Reconquista 336. U. T. 31-3193.

CAMARA DE COMERCIO JAPONESA: Avenida Roque Sáenz Peña 618. - U. T. 33-1452.

INSTITUTO CULTURAL ARGENTINO-JAPONES: Viamonte 1435.

ASOCIACION JAPONESA: Patagonia 840. - U. T. 23-4803.

COMPARIA DE VAPORES O. S. K.: ROQUE S. PEÑA 616 - 2.º Piso U. T. 33-1051 - 1052 - 1053 y 3505